



学校法人
鎌倉女子大学

子どもの遊び —ピーテル・ブリューゲル (父)

「児童学部」の開設記念としてピーテル・ブリューゲルの「子どもの遊び」をマルチメディアラウンジの南の壁に設えました。

まだ中世の雰囲気が残る古い街の広場に子どもたちが集まり、思い思いに遊びに打ち興じている様子が丹念に描かれているものです。場所は、ベルギーのアントワープがモデルといわれます。

規模は、118×161cmの原寸大。一つひとつ数えてみれば、約250人の子どもと約90の遊びを確認することが出来ます。当時の人々の遊び方は勿論のこと、考え方も十分に見て取ることの出来る生活感あふれる絵画です。

陶板に名画を寸分たがわず精緻に焼きつける技法が開発され、原画とは違って、そっと間近に寄って観ることも出来るものです。

よく原画を複製したものにはフェイクとの批判や揶揄が浴びせられることが少なからずあるものですが、一度ご覧下されれば判るように、これはこれで全く別の芸術作品とっていいものなのです。

さて、ブリューゲルは、イタリアに遊学したこともありましたが、主として活躍した場所はフランドル。その意味で、大きく見れば、北方ルネサンスの芸術家にくることが出来る作家です。フランドル絵画の巨匠として美術史にひと際異彩を放っていますが、最も有名なものは、黙示録的雰囲気をたたえた「バベルの塔」といいでしょう。これに代表される宗教的題材を扱った絵画も残していますが、しかし他方彼は、農村風景や市井の人々の暮らしぶりを好んで多く描きました。ですから、彼のことを「農民画家」と呼ぶ言い方もあるくらいで、この「子どもの遊び」は、後者のジャンルに属する作品とっていいでしょう。

もっとも、この絵の解釈には昔から相当の誤解・曲解がまわりついて、ヴォルフガング・ステカウの美術解説などは、その最たるものといわなければなりません。

「ブリューゲルの1560年の絵画において、子供たちは大人を意味する。この何の偽り隠そうとしない姿をかりて、懲らしめられているのは、まさに大人たちの愚行であり、彼らはただ大きさと（部分的に）衣装によってだけ子供である。— 中略 —これは少年時代の展望図というよりも、愚行の展望図である」。

かつて、この文章を読んだ時、確かにブリューゲルには「ネーデルラントの諺」など、シニカルなモチーフの作品も少なからずありますが、それにしても随分穿ち過ぎた解釈と、怪訝に思ったことがありました。

あの長閑な田園風景と純朴な農民生活をありのままに描いた「刈入れ人」や「農民の踊

り」の作家が、何故子どもを主題にして、そうしたアイロニカルな逆説的作品を描かなくてはならないのか、もう少し絵自身に見入って素直に観ればよいものを、と不思議に思えてなりませんでした。

獵から帰ってくると、丘の上から街の人々が楽しげに氷上でスケートやカーリングをしている姿が見える有名な「雪中の狩人たち」も、そうした素直な心意識グミューツトに基づくものでしょう。

こうした私の疑問を払拭してくれたのが、森洋子氏の優れた研究書、その名もズバリの『ブリューゲルの「子供の遊戯」― 遊びの図像学』(未来社)です。この本と出会い、やはり私の直観はそう間違っただけではなかったと、意を強くしました。

長年にわたって、この絵についてのさまざまな解釈や、個々の遊びの種類を当時の風俗にまで立ち帰って精密に分析した森氏によれば、先のステカウに代表されるような見解は、ブリューゲルの生きた時代よりも下った一七世紀のプロテスタントの思想家の「大人は愚かな子供の遊びから、自らの戒めを認識しなければならない」(傍点筆者)という、いささか屈折した解釈に由来するものであるということです。

17世紀という時代は、ルターをもって嚆矢とする宗教改革のいまだ影響下にあり、激動の時代の常として、過剰な教条性と直情な急進性を求める気運が、こうした屈折した解釈を生み出す土壌となったのかもしれませんが。しかし、子どもの遊びを愚かで見立て、したり顔して戒めの素材とする倒錯した大人の愚かさからは、子どもの実像は見えて来はしないでしょう。

“childish”と“childly”、チャイルディッシュ “kindisch”と“kindlich”、キンディッシュ 「子どもじみた」と「子どもらしさ」とは、全く違った事柄。『聖書』には、「おほよそおきなご幼児のごとくに、神の国をうくる者ならば、これ之に入ることあた能はず」(ルカ伝18章17節)という言葉さえあります。手垢にまみれたマコトシヤカな解釈から解放されて、正に童心に帰って、この「子どもの遊び」に素直に見入れば、当時の子どもたちの心や、ブリューゲルの描くごっこ遊びの風景を通して、子どもたちを取り巻く当時の人々の暮らしの心象風景が蘇ってくることでしょう。

観て楽しく・数えて楽しく・調べて楽しい絵画です。児童学関連の授業の材料にもして頂ければ、これを飾る甲斐もあるというものです。

[>前のページへ戻る](#)